

関東地方の保育士養成校における学生の自己肯定感の向上をめざす 実習の取り組みと課題に関する研究



【中野キャンパス】人文社会学部 教育学科 保育・幼稚園コース 講師

浅見 優哉 Asami Yuya

URL: [帝京平成大学 教員業績紹介ページ](#)

キーワード: 保育者養成・実習準備・保育実習・保育所実習・自己肯定感・
保育者養成の質の向上



研究の概要

SDGs 目標 3: すべての人に健康と福祉を

SDGs 目標 4: 質の高い教育をみんなに

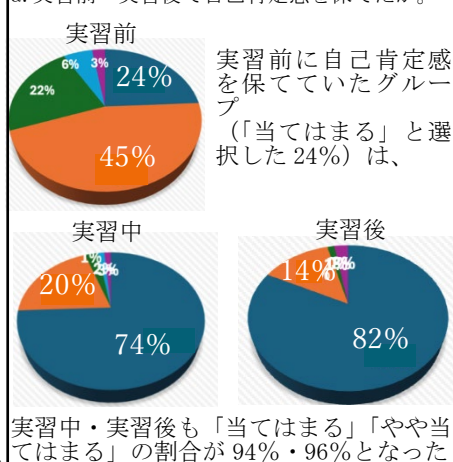
内閣府「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査（平成25年度）」の項目「私は、自分自身に満足している」では、日本の高校生の肯定回答は45.8%にとどまり、米国（86.0%）の半分程度であるなど、国際比較で顕著に低い水準が示されている。こうした背景を踏まえると、大学入学後に意欲喚起を図っても、個別指導や精神論に依存する対応だけでは持続的な行動変容の実現は難しい。学生が自ら学びに向かう状態へ移行できるよう、教育課程に組み込まれた学修支援の設計が不可欠である。

保育者養成の中核である保育実習では、実習先から無気力さや打たれ弱さが指摘される。本研究は、その一部が自己肯定感の低さと関連する可能性に着目し、要因の特定と教育的介入の設計を目的とする。本研究では自己肯定感を「ありのままの自分を受け止め、否定的側面も含めて自分が自分であっても大丈夫だと感じられる感覚」と定義した。

学生アンケート（自己申告）に基づく分析（抜粋）では、実習前に自己肯定感を保っていた学生の90%超が、実習中および実習後も自己肯定感を保てたと回答し、その83.1%が実習期間中、日常的に前向きな気持ちで実習に参加できたと回答した。実習の具体的なイメージを事前に形成できていた学生の90%が「十分に準備できた」と回答し、そのうち約70%が自己肯定感を保てた一方、イメージ未形成群では35.7%が準備不足と回答し、そのうち約52%が自己肯定感を保てなかった。学生が有効と捉えた準備は、教材作成、体力・体調管理、資料・教材準備、リサーチ、練習等の6類型に整理でき、実習経験者が挙げる事前学習の必要事項も、子どもと関わる機会の確保や社会性など8類型に整理できた。

これらは主観指標ではあるものの、少なくとも学生の体感として、「実習を具体的にイメージできること」および「準備行動を実行できること」が実習参加時の前向きさや自己肯定感の維持と関連している可能性を示している。今後、特定の授業や演習を対象に、具体的な効果測定と改善サイクルを構築する。これにより、学生が実習を見通し、必要な準備を主体的に進められるようになる教育課程に組み込まれた学修支援の設計をおこない、実習を通して意欲的に学べる学生の養成を目指す。

学生アンケート（自己申告）に基づく分析
a. 実習前～実習後で自己肯定感を保てたか。



実学へのつながり・産業界や自治体へのアピールポイント・協力可能事項・協力希望事項

本研究を通じて、学生に「意欲を持って学ぶこと」を言葉で促すだけでは不十分であり、学びへの移行を支える具体的な提案と、教育課程に組み込まれた学修支援の設計が重要であることが確認された。

実習の具体的なイメージ形成と準備行動の促進に資する授業は複数挙げられたが、とりわけ本学で実施している「子育て支援演習」のように、子どもや保護者と直接関わる演習系授業は、実習への見通し形成や自己効力感の獲得に寄与し得る点で、重点的に検証すべき教育資源であると考えられる。

今後は、自治体や実習受入施設等と連携し、ニーズ調査に加えて、現場および行政における課題認識を把握する。そのうえで、現場のニーズを参照しつつ、養成課程としての到達目標と照合し、双方の整合性を高めることで、実習に向けた学修支援の改善と実効性の向上を図りたい。

知的財産・論文・学術発表など（詳細は右上 QR コードの教員紹介からご確認ください）

【関係研究】保育者養成校における学生の自己肯定感について -先行研究のまとめと枠組みの構築-

【所属学会等】日本保育学会、日本幼児教育学会、日本ヒューマンケアリング教育学会、早稲田大学教師教育研究所